

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

『週刊現代 - JR東日本革マル浸透問題告発 - 』連載第2回

元運転士が驚愕の実名告発！

『週刊現代』が、JR東日本の革マル浸透問題を連載記事で告発した。本紙は驚くべきこの事実をシリーズで紹介する。(オンライン有料購読にて入手・・・一部要約抜粋)

<週刊現代2006年7月24日発売号>

対向電車からのパッシング

佐藤氏の証言からは、さらに驚愕すべきJR東労組組合員運転士による“凶行”の数々が明らかになった。彼らは私が乗務する列車を、徹底的に調べ上げ、あらゆる危険行為を仕掛け、事故を誘発するよう仕向けてきた。

'99年11月の初めのことでした。中央線の西荻窪駅付近を走行中、対向車線の電車から2～3回パッシングをされたのです。パッシングされると一瞬目が眩くらみ、集中力を欠いて、信号を見落とすこともある。つまりは事故に繋がる大変危険な行為なんです。その電車の運転士は、前年に三鷹電車区に配属されたばかりのJR東労組青年部の組合員でした。その数日前には、信号を隠されたこともあります。中央線の最終電車の乗務を終えて、豊田駅構内の留置線まで電車を動かしていた時のことです。駅構内の信号機の前で4～5人のJR東労組組合員が待ち受けていた。信号機の高さは約1m。彼らは固まって立って、信号機を見えないように隠していた。そうして私を違う線路に誘導しようとしていたんです。

'97年10月、『スーパーあずさ13号』と回送電車が衝突し、お客様62人に怪我を負わせた事故がありましたが、回送電車の運転士が、赤信号を見落としたことが原因だった。どんな場合であれ、信号機を隠すなど、運転士が絶対にやってはならないことです。にもかかわらず、彼らはJR東労組に洗脳され、最低限のモラルさえ守れなくなってしまったのです」(佐藤氏)

佐藤氏の証言から次々と明らかになった、JR東労組組合員による凶行——。もはや、「往来危険」(刑法125条)にも相当する“犯罪行為”と言わざるを得ないが、これが僅か数年前に、われわれが通勤や通学に利用していた首都圏のJR東日本で、実際に繰り返られていたというのだから、背筋が凍る。そして佐藤氏は、JR東労組の凶行を放置していた、JR東日本管理者に対しても怒りを露あらわにする。「彼らの嫌がらせは、大事故にも繋がりがねなかったので、会社に言って、管理者を乗せ、乗務したこともありました。しかし、彼らは管理者がいようがいまいがお構いなし。運転席まで来て、『てめえが佐藤か』、『お前、よく覚えておけよ、この野郎』とからんでくる。しかし、隣にいる管理者はじっと固まり、見て見ぬふり。管理者も、彼らを制止して、彼らの“次なるターゲット”にされることが怖かったのです」

まさに恐るべき「職場秩序の崩壊」だ。いったい、この状況をどう解釈すれば(職場の秩序維持や所属する社員の管理については、会社において日頃から徹底しております)(JR東日本広報部)などという回答ができるのか……。佐藤氏が、JR東労組から脱退させられて約3ヵ月後の'00年1月、なんとJR東日本当局は「加害者」であるJR東労組組合員ではなく、「被害者」の佐藤氏を運転業務から外すことで、「職場の混乱の收拾」を図ったというのだ。佐藤氏はその後2ヵ月間、三鷹電車区内の倉庫の掃除や、草むしりを命じられることになる。

「結局、会社はJR東労組の言いなりでした。なぜ『被害者』である私が、運転席から降ろされ、草むしりをしなければならないのか。一方のJR東労組は、私を運転席から降ろしたことを勝ち誇っていました」(佐藤氏)